

(1) 単元名： 1年 20までの数  
2年 たし算とひき算のひっ算

(2) 本時の目標： 1年 20までの数について理解を深める。  
2年 3口のたし算をひっ算形式に表して、ひっ算ができる。

【 国頭村立安波小学校 】

1年生2名、2年生4名、計6名の複式学級。  
3年生1名、4年生1名、計2名の複式学級。  
5年生0名、6年生2名、単式学級。全児童10名。  
校長、教頭、教諭3名、養護教諭、事務職員、用務員  
非常勤講師(県加配)、学校職員計9名

日本国の中央(東京)からどれほどの距離があるだろうか  
沖縄県本島最北端の村国頭村でもさらに山間のへき地に位置  
する。東京から飛行機で約2時間30分で那覇空港、さらに  
自動車約3時間。那覇から1時間半ほどで本島の都市地区  
を離れ、ほとんど信号機のない国道と県道を北へ1時間30  
分移動する。詳しく記することはできないがこれが沖縄本島内のへき地、国頭村である。限界過疎地域と言っ  
ても過言ではない。

沖縄のこんなへき地ではあるが、日本国憲法において「学問の自由」、「教育を受ける権利と機会」は、全国  
の子ども達と同じように平等にされなければならない。「へき地だから」といって教育に妥協やあきらめは許  
されない。教師も教育公務員という職務上の使命において、地域性における教育の不平等に屈することはでき  
ない。へき地だからできないのではなく「へき地だからこそできる」真心の教育の追求に学校と地域が手を取り  
合って取り組んでいるのが安波小学校である。私にとって安波小での授業研究会は、癒しの訪問である。



平成24年度より「学びの共同体」の理念による授業経営を推進している。複式の少人数の中で、どのよう  
に学びを成立させ、どのように学びを深めさせるか。まじめで一生懸命な教師達の挑戦がここにある。写真は  
24年度の授業研の様子である。互見授業は日常である。学期に最低1回は3名の教諭が私を招聘しての授業  
公開を実施している。飾らない、実に純粋で熱心な教師達である。

【複式授業風景】

「わたり」で授業者がいない時、ど  
のような対話や学びが交わされるか  
同僚が観察する。



【共有する】

安心して発表する仲間、ぼくの考  
え方を伝える。聴いてくれる仲間と  
教師の存在が前提である。



【管理職の関わり】

校長先生による、全校生徒を対  
象にした授業である。校内のすべ  
ての人が「学び」である。



【教育の目的】教育基本法：第一章、第1条『教育の目的と理念』

「教育は人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者を・・・育成する。」とある。

先ごろ平成25年度全国学力学習状況調査の結果が公表され、メディア、新聞等で話題とされている。その  
結果に各都道府県、市町村、学校が一喜一憂している。私もその結果は子ども達のひとつの「指標」や現状の  
子ども達の学習状況のバロメーターとしての意義は十分感じている。8月28日NHKの時事公論において、  
現在の学力調査はいわゆる「見える学力」の査定である。上記の教育の目的に記されている「人格の完成」、  
「平和(安心)」、「民主的(平等)」などのいわゆる、豊かな情操や道徳心はどう図られ、どう測定されるかにつ  
いては語られていないと解説している。ちなみに、教育基本法には「学力の向上を目指す」とはない。第2条  
『教育の目標』の中に「幅広い知識と教養を身につけ…」とある。傾向と対策、競争による点数獲得主義で『教育  
の目的と目標』がはたして達成されことになるのだろうか。私は安波小の子ども達と先生方の「支え合う」  
姿をいつも見て癒されている。「人格の形成」「道徳心」などの「見えない学力(心)」を私は大事にしたい。

【3枚の写真】 安波小の休み時間の風景



写真①



写真②



写真③

安波小の休み時間の風景である。写真①、養護教諭に算数の問題をつくってもらい解答した後、〇をもらっている場面。写真②、同じく保健室で2年生の女の子に「問題を作って」とせがまれて、それに応えている6年生のお姉ちゃんである。写真③、授業前デジタルテレビで算数の問題を解いて遊んでいる二人、内容は3年生レベルの図形の問題であった。手前の2年生の女の子たちは、先ほど保健室で解いた問題を担任に見てもらっているところだ。それにしても写真③のくっつき具合を見てほしい。「かわいい」の一言、すべての学校生活に安心と楽しさを感じている。実に癒される風景である。



写真④

写真④⑤⑥は2年生である。写真⑦⑧⑨が1年生である。2年生と言えどもこの教室では先輩である。授業者が1年生に関わっている間は、自分たちで課題に取り組む(写真④)。当然「分からない」ことは互いに訊き合い寄り添う。「支え合う」が当たり前、当然のように繰り返される。授業者が最初の課題の確認に来た(写真⑤)。子ども達は一齐に教師に寄り添う。「語る…語る」。教師は新たな課題を2年生に下してすぐ1年生の元に戻る。2年生に関われる時間は一時だが、隣で待つ1年生を気にかけて教師を引き留めることは決してしない。2年生はさらに弱い1年生に教師を譲ることが余儀なくされているが、それも「当たり前」で片づけられてしまう。たくましい2年生たちである。



写真⑦



写真⑤



写真⑧



写真⑥

本時では、授業者は2年生に3つの課題を準備し、授業時間のほとんどを1年生に費やした。学習内容や子どもの状況によって教師の関わりの度合いをうまく調整しなければならない。その見取りができるのはやはり学級担任が一番である。単純に÷2の時間配分にならないのが教師冥利である。本時ではこのパターンが3回繰り返された。



写真⑨

子ども達は、いつも身近な大人の背中を見ながら成長していく。教師が教育の理念の旗を降ろしてしまうといくら教師が「夢を持って」「あきらめるな」と言っても、子ども達の心に届かないものである。「学びの共同体」は教育の授業の方法論ではない、「理念の実践」である。保護者や地域を理由にして理念の旗を掲げることが躊躇する者もいるが、本来教師はそうであってはならないと考える。

へき地の学校において、特に一人の人間としての教師の存在は大きい、教師のちょっとした言葉や仕草、その生き様までが子ども達に影響を及ぼす。子ども達の「豊かな未来の創造」に向けた教師の理念が大切である。

教師が常に子ども達の未来に夢を抱き、子ども達の幸福を追い続ける姿に「真心の教育」が実践されるものとする。安波小及び国頭村すべてのへき地校における「真心の教育」への挑戦に大いに期待を寄せたい。

奈々子先生、授業公開ありがとうございました。二学期早々の私の勝手な願いを受け入れてくれて感謝します。「かわいいね、いっしょうけんめいだね！」この言葉だけで済ましたくない私への癒し、うまく言葉で言い表せないしっとり感がある。そんな安波小学校ですね。